

学位論文題名

カフカス総督ミハイル・ヴォロンツォフの辺境統治
(1845-54)

—行政・経済・教育文化・軍事の政策パッケージ—

学位論文内容の要旨

本論文はナポレオン戦争後の19世紀前半のロシア帝国史に焦点を当て、帝国が支配領域を拡大してゆく中で辺境総督(府)が重要な政治的機能と歴史的役割を果たしたことに注目する。この時代はウィーン体制の下でヨーロッパ国際秩序の一端を担うことになったロシア帝国が支配領域の拡大を続けた勝利と侵略の歴史に彩られており、その勢力版図は西部ではフィンランド大公国、バルト海沿岸地域、ポーランド立憲王国を支配してヨーロッパと隣接し、南部では新ロシアやカフカスを支配してペルシアやオスマン帝国と対峙し、東部ではシベリアや中央アジアに徐々に拡大するという多方面に展開された。これは同時に帝国内部に新たな政治、経済、社会、言語、民族、宗教などの特殊性と例外性を抱えた帝国建設の過程でもあり、辺境での様々な経験が領域ごとに支配体制の多様性と複数性を生み出したことで、ロシア帝国全体としては辺境総督制度を統治原理とした多面的帝国が構築されたのである。

この帝国辺境の統治実践を実証するため、研究事例にはロシア帝国南部の新ロシアとカフカスで辺境総督を務めた、ミハイル・ヴォロンツォフのカフカス支配体制(1845-54)を取り上げる。そして総督(府)が支配現地の内政と軍政を兼任して、強大な権限とリーダーシップによって実施された独自の統治政策を「政策パッケージ」としてとらえ、領内の行政・経済・教育文化政策と対外的な軍事政策の四つの角度から分析する。これにより従来あまり注目されてこなかったヴォロンツォフ総督によるカフカス統治の実態とその歴史的意義をロシアの一次史料をもとに明らかにして、そして帝国辺境の統治機構(ステイト)に主眼を置いたロシア帝国論の再構築を目指す。

こうした見地から、第一章ではこれまでのロシア帝国論が抱える多民族帝国研究やナショナリズム研究への対象の偏重を指摘し、それらとは一線を画した、帝国の統治権力そのものを分析することの学術的意義を示す。また本論文の先行研究に当たるヴォロンツォフ研究、カフカス統治史、カフカス戦史のそれぞれの特徴を明らかにし、特にカフカス戦史がソ連時代に「シャミーリ論争」へと収斂した経緯とその歴史学イデオロギー闘争の内容と変遷を見てゆく。

そして辺境総督制度を領域的な権力単位と位置づけることで、帝国辺境の個々の秩序形成が規範的・画一的に把握されるものではなく、辺境領域ごとの政治的危機への対応(帝国秩序の形成と支配の正当化)や支配現地の歴史的文脈・制約を反映した、統治実践の経験の積み重ねによって支えられていたことを明らかにする。これはロシア史学が永らく抱えてきた「ロシアはどこから始まり、どこで終わるのか」という本国と辺境の境界や同化・差異化をめぐる命題に対して、本国の国民国家論を

出発点とした辺境の定義ではなく、ロシア帝国が拡大する中で辺境それ自体が主体的に形成されたという逆の視点から回答を示してゆくものである。

第二章は、ヴォロンツォフ総督のカフカス辺境統治を分析するための前提条件である、彼の軍人貴族のキャリアと政治姿勢を見る。特に幼少期から青年期に至るまでのイギリス貴族生活で培われた啓蒙思想や自由主義思想への親和的な政治姿勢と、名門ロシア貴族としてのツァーリへの忠誠心、そして新ロシア総督時代の辺境統治に見られる行政・経済・教育文化政策の「政策パッケージ」を中心に分析することで、カフカス総督との比較で多くの類似点が見出せることを示す。これは新ロシアまたはカフカスという個別の辺境総督（府）研究だけでは明らかにできない点であり、本研究のように両方の総督に就任したヴォロンツォフという人物に焦点を当てることで得られる学術的成果であると考えられる。

第三章は、ヴォロンツォフがカフカス総督に就任する以前のカフカス統治史という現地の歴史的文脈・制約について言及する。具体的にはロシア帝国とカフカスは二項関係ではなく、カフカスを巡ってはロシア帝国、オスマン帝国、ペルシアの三大国によって領土獲得と権益争奪の「グレート・ゲーム」が中央アジアよりも先立って戦火を交えながら展開されていたことと、そしてグルジア王国併合以降に創設されたカフカス長官体制による統治政策と長官人事の変遷を追いながら、行政政策を中心として経済政策や教育文化政策にも注目する。とりわけ七代目エルモロフ長官までは長官ごとに支配体制の多様さを知ることができる。また1830年以降のザカフカス委員会による直轄統治と長官体制との権力関係や利害対立を分析することで、およそ半世紀にも及ぶカフカス統治史の紆余曲折を明らかにし、そしてそれらの政治的混乱を收拾するという不可避な状況からカフカス総督（府）という強大な権限を有した辺境統治機構が歴史的な文脈・制約から創設されたことを明らかにする。これは帝国辺境の秩序形成のために総督府が歴史的役割を果たした重要な事例である。

これらを踏まえて第四章は、ヴォロンツォフ総督によるカフカス辺境統治を「政策パッケージ」としてとらえ、領内の行政・経済・教育文化政策と軍事政策の四つの角度から分析する。ザカフカスの内政については統治政策の時間的経過を考慮に入れて、①彼が赴任した1845年3月25日から同年末まで、②46年から48年まで、③49年から54年までの三つに区分する。これにより各々の時期にどのような統治政策が重点化されたのかという特徴を明らかにし、彼の「政策パッケージ」の実態を政策の中身と時間軸の二つの尺度から分析する。さらに軍事政策の「新戦略」についても、具体的な戦争計画と軍事戦略について明らかにする。特に1845年春のダグ会戦での敗戦後に採用が決定された、軍事的・経済的な山岳包囲作戦と大規模な森林伐採、また山岳諸民族に対する反戦プロパガンダの利用などに注目する。これによりシャミーリとミュリディズムを山岳奥地へと徐々に追い詰めながら形勢を有利にし、その合間に各所要塞を小規模な会戦の継続によって攻略するという長期的な持久戦争（計画）が果たした軍事史的な意義について検討してゆきたいと考えている。

そして結論ではヴォロンツォフという軍人貴族のキャリアと功績を通じて、彼がロシア帝国史に残した歴史的意義を二つ示す。一つはロシア帝国の辺境統治への歴史の教訓であり、辺境総督（府）が強大な権力を有したことで帝国辺境の秩序形成がなされ、そして辺境それ自体が主体的に形成されたという歴史的事実である。もう一つは彼の部下であったバリャチンスキー、カウフマン、ドンドゥコフ＝コルサコフがカフカス辺境統治でキャリアを積んだ軍人貴族として成長し、彼らが19世紀後半のカフカス、中央アジア、極東地域の辺境統治で重要な活躍を果たしたことである。ロシア帝国史の辺境統治を考える上でヴォロンツォフ総督の存在は大いなる政治的遺産である。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 中 村 研 一
副 査 教 授 鈴 木 一 人
副 査 教 授 吉 田 徹

学 位 論 文 題 名

カフカス総督ミハイル・ヴォロンツォフの辺境統治 (1845－54)

－行政・経済・教育文化・軍事の政策パッケージ－

花田氏の博士申請論文は、19世紀中葉のロシア帝国の形成期に、ロシア貴族としては例外的に英国で育ち、また、ナポレオン軍に勝利して国民的英雄となり、その後、さらに新ロシア、カフカスの辺境総督を歴任した軍人貴族ミハイル・ヴォロンツォフのカフカス支配体制と統治政策に焦点を当てた国際政治の歴史論文である。また花田氏は、この歴史的事例をとりあげることで、ロシア帝国が、ヴォロンツォフの辺境総督という支配体制の成立とその政策システムの展開によって、ロシア帝国が辺境から形成されたという理論的命題を論証し、政治理論上の貢献を試みている。

論文の構成は下記の通り。

第一章「本研究の目的」では、ロシア帝国論、ヴォロンツォフ研究史、カフカス統治史、カフカス反乱史に区分して、史料状況と研究動向を展望した。そのそれぞれのなかで花田氏の論文の目的を明示した。

第二章「ヴォロンツォフの半生と政治姿勢」では、ヴォロンツォフの名門貴族としての出自、英国に育った例外的な経歴、そして新ロシア総督として展開した政策の特徴を分析した。政策主体としてのヴォロンツォフの人物的・思想的背景を明らかにした。

第三章「カフカス統治史」では、ヴォロンツォフに先立ってカフカスを統治した諸長官による統治を検討した。それによってヴォロンツォフ総督が着任した時点にいたるカフカスという辺境の歴史的文脈を明らかにした。

第四章「ヴォロンツォフ総督の「政策パッケージ」」では、ヴォロンツォフのカフカスで展開した辺境統治を統治政策と反乱平定の両面から「政策パッケージ」という概念を用いて分析した。そして行政・経済・教育文化・軍事のそれぞれの分野におけるヴォロンツォフ型の「政策パッケージ」を明らかにした。

論文の特徴と独創性は以下の四点に要約できる。

第一は、膨大な一次史料および二次史料と先行業績を咀嚼したうえで築かれた歴史論文であることである。花田氏が使用した一次史料は、「カフカス古文献編纂委員会文書集」第10巻、「ヴォロンツォフ公アルヒーフ」35巻－40巻、「ヴォロンツォフ家アルヒーフ」、およびヴォロンツォフの総督時代の日記、秘書の回想録などである。また、依拠した二次史料、および、先行研究群は、二度のロシア留学（モスクワ・サンクトペテルブルグ）とクリミア（ヴォロンツォフ宮殿の所在地）への研究旅行とによって、現地の歴史学・民族学の権威から学習し、また先端研究者と交流することのなかから収集した広範なものである。

第二は、花田氏の論文の狙いが、ロシア帝国研究において独創的な視角からなされていることである。ロシ

ア帝国研究が、多民族やナショナリズム、あるいはイデオロギ－的な視角からなされてきたのに対して、花田氏は着眼点を転換し、19世紀のロシア帝国が、中央権力や民族を主体とするのではなく、辺境領域に生じた政治的危機の收拾という統治実践の重ね合わせによって、辺境それ自体が統治主体として形成されたことによって支えられている、という視点をとっている。

第三は、辺境統治によるロシア帝国の形成という分析視角は、ポーランド、シベリアなど多くの辺境総督の統治事例を網羅的に分析することによってはじめて検証しうる命題であるが、花田氏は、数ある辺境総督のうち、新ロシアとカフカスという二つの辺境総督を歴任したヴォロンツォフの辺境統治を戦略点として研究することによって、ロシアにおける特徴的な複数の辺境統治史を比較するという、普遍化に向かって開かれたアプローチをとった点である。さらに、ヴォロンツォフのカフカス統治は、その下から、他の辺境領域の統治責任者となっていく帝国統治の学校の機能を果たした点に着眼している。

第四は、ロシア帝国の辺境のなかでも、もっとも辺境性の高く、かつ、先行研究の薄いカフカスを研究対象としたことである。すなわち、そこには山岳諸民族による宗教性の高い反乱が長期にわたって継続した。また、その一部にグルジア王国が存在しただけでなく、そこにロシア・トルコ・ペルシャ三帝国の権力・権益・宗教が交錯し、言語的なパッチワークを構成する領域であった。この最も辺境性の高い辺境を統治することを一つの試金石として、帝国統治の「政策パッケージ」が形成されたことを、花田氏は論証しようとしている。

花田氏の論文のもつ特徴と独創性は、ロシア帝国史研究の重要な礎石となる歴史研究であり、また、ロシア帝国に関する政治理論上も、学界に斬新でパラダイム上の転換を促す重要な貢献である。

これらの点に高く評価してなお、四つの点で不十分性が見られる。

第一に、全四章と結論において、在来型のロシア帝国史研究に対抗する論文構成上の意図が明示的に貫かれていないこと。第二に、第三章でヴォロンツォフがカフカス総督に着任したことがロシア帝国形成に画期性意味を持つことが十分に明示されていないこと。第三に、第四章で用いられる「政策パッケージ」という鍵概念における普遍性と固有性（領域性的にカフカスに固有か、また人物的にヴォロンツォフに固有か）が理論的に練り上げられていないこと。第四に、ヴォロンツォフがもったロシア貴族のなかでのマージナルな態度・経歴という特徴が帝国統治者として適性とどのように関連するかが深く分析されていないこと。

ただし以上の不十分性は、歴史論文としての意義を大きく損ねているわけではない。また、それらの不十分性が目立つ理由は、史料・歴史解釈の可能性が厳しく限られた条件のもとで、きわめて大きな理論上の問題意識をもって対象と取り組んだことから生じている面をもっており、論文全体の評価として見るなら肯定的に評価することもできる内容でもある。

以上を総合的に判断して、審査員全員一致で博士（法学）の学位を授与するにふさわしいとの結論を得た。